

第 10 回 相馬愛蔵と黒光 〔後編〕 「相馬愛蔵・黒光(良)の業績を検証する」

H28.10.27

I 穂高時代の相馬愛蔵の業績

1 蚕種製造の指導(著作と実践による指導)

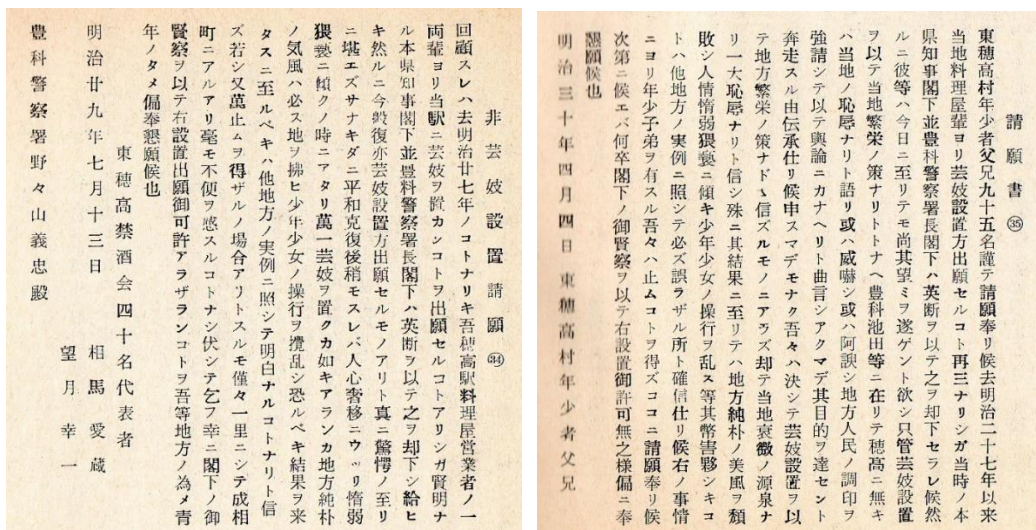
「北海道から引揚げて、生家に腰を据えて三年目、愛蔵は、早くも『蚕種製造論』の著者として知られるようになった。製糸を目的とする養蚕と、蚕種を目的とするそれとは、飼育法に、はっきりしたちがいがなくてはならないことを論じた著作であった。養蚕の実験研究に没頭するかたわら、各地の實際を視察調査した結論をまとめたもので、田口卯吉の主宰する経済雑誌社から刊行された。/ 問題と考えられていた点をはっきりついたものだったので、本書は全国蚕業家に注目され、たちまち版を重ねた。その原理による蚕種の注文と同時に、実地を学ぼうとする研究生もやって来た。関東をはじめ、はるばる九州、四国から来た研究生たちが、相馬家に寄食して、養蚕を手伝った。」

(臼井吉見『安曇野』第一部より)

2 東穂高禁酒会と芸妓設置反対運動

(1) 東穂高禁酒会の成立 相馬愛蔵が中心になって明治 24 年 12 月 20 日に創立。相馬愛蔵は郷里の東穂高村にキリスト教と禁酒運動をもたらす。「毎月の例会はさながら小演説会の観があった。愛蔵が選挙競争と題して、青年はかかるものに関係すべからずとし、青年の品格を説いて、近ごろ月見をする青年のすくないことを嘆けば、(井口)喜源治は、鴉片戦争を論じ、支倉六右衛門や桜田門外の変を語った。(竹岡)直司は国粋と洋風を弁じ、別の青年は、西郷隆盛について語るという風であった。(中略) やがて、会の活動が実行につながって行ったのは自然のなりゆきであった。(中略) 隣村の一日市場まで出かけて行って、禁酒思想普及の幻灯会を催したこともある。」(臼井吉見『安曇野』第一部より)

(2) 芸妓設置反対運動



資料 「非芸妓設置請願」(明治 29 年 7 月) 資料「請願書」(明治 30 年 4 月)

「耕地ごとに演説会を開き、青少年の父兄の反対署名を集め、知事あての請願書を豊科警察署に提出した。演説会に尚江の来援を求めたりもした。さわぎが大きくなって、料理屋

側の設置請願は一応不認可となった。だが、おとなしく引っこむ相手とは思われなかった。再請願をはかろうと、あれこれ工作がつづけられた。信濃富士が耶蘇退治の火の手をあげたのは、これに呼応するものであった。」(臼井吉見『安曇野』第一部より)

3 研成義塾創設と井口喜源治への支援

(1) 井口喜源治略歴に見る相馬愛蔵との係わり

明治 3 年 5 月 3 日 (1870 年)	長野県南安曇郡穂高町にて、井口喜十・このの長男として生まれる。
9・2	穂高小学校支校保等学校 (後の東穂高小学校) に入学。
22・6・12 (1889 年)	長野県立松本尋常中学校を卒業。在学中、米人宣教師エルマー (英語教師) によりキリスト教に開眼される。後、明治法律学校に学ぶ。
23・9 (1890 年)	明治法律学校中退後、上高井組合高等小学校小布施分校の教師として赴任。
25・9・1 (1892 年)	松本尋常高等小学校 (後の開智学校) に高等科四年担任として招かれる。
26・3・2	北安曇郡会染村、内山定次二女きくのと結婚。七男三女を挙ぐ。
4・10	東穂高組合高等小学校に転任。
12・20	相馬愛蔵、望月直弥らの創立した東穂高禁酒会に入会。
27・3・24 (1894 年)	村内への芸妓置屋設置問題に対し、禁酒会員その他と共に精力的な反対運動を始める。
31・11・7 (1898 年)	芸妓置屋実現後、校内風紀も乱れ、謹厳なる先生は却って校長初め一部同僚教師らの卑劣なる排斥にあい、葛藤の末遂に退職。村内有力者臼井喜代、相馬安兵衛らの協力を得て研成義塾を創立。東穂高村矢原集会所を仮校舎とする。
33・7・25 (1900 年)	荻原守衛と上京、内村鑑三の講習会に列し、後共に東海道を下り、富士山に登り甲州路を旅して帰る。
34・1・1 (1901 年)	東穂高村三枚橋に新校舎を建設、新年式を挙ぐ。相馬愛蔵、望月直弥等参列。
34・4・20	私立学校研成義塾設立認可来る。
34・9	22・23・24 日、内村鑑三、講演会を義塾に開く。
41・3・13	外遊 7 年の荻原守衛を明科駅に迎える。
43・10 (1910 年)	15・16 の両日、義塾創立満 12 年感謝講演会を催し内村鑑三講演。荻原守衛死去 (4 月 22 日)
大正 5・5・11 (1916 年)	南安曇郡長野々村亨義塾参観に来る。この時代義塾の経営困難なるを知り補助金の交付方しばしばありたれど其の都度謝絶す。
7・3・7	救世軍山室軍平大佐来塾。午後 2 時より穂高劇場にて講演、来会者千人余盛會。
昭和 3・12・2 (1928 年)	研成義塾創立 30 年の記念会を穂高小学校に開き、斎藤宗次郎内村鑑三の代理人として出席、講演原稿を代読。来会者 800 余名盛會。「回顧三十年」として「井口喜源治」追悼記に掲載
5・3・28	内村鑑三の葬儀に上京参列。
7・10・20 (1932 年)	午後 1 時脳溢血にて倒る。それ以後再び立たず。
8・5・9	山室軍平見舞いに来り病床に侍し祈祷す。
13・3・23 (1938 年)	病気につき廃校届を県知事宛提出。
3・29	研成義塾廃校の認可来る。
7・21	午後 11 時病革り遂に召さる。享年 69 歳。

(略歴の出典は『安曇野 人間教育の源流』<平成 15 年井口喜源治記念館刊>)

(2) 支援 「この研成義塾の精神的支柱となったものは、内村鑑三であり、経済的支柱となったのは相馬愛蔵であった。井口が亡くなる直前<相馬さんに感謝しつつ逝ったと伝えてくれ>と言い残した」(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』<昭和 43 年中村屋刊>より)

II 相馬夫妻による中村屋の創業と独創的な経営の展開

1 素人による本郷での創業 (明治 34 年 12 月)

(1) 創業とその動機 「私が 32 歳にもなって商売に志したのは、自分が生まれつき勤め嫌いで、あくまで独立独歩、自由の境涯を求めたことに原因するのはいうまでもないが、それとともにもう一つ直接の動機となったものがある。それは信州の田舎に嫁して来た私の妻が、風俗習慣の違いと安易な田園生活に希望を失い、精神的苦悩から心身疲労して病気になる、行末危ぶまれる状態になったので、病氣療養とともに何らかここに新たな生活を起こす必要があったのである。」(相馬愛蔵『一商人として』<昭和 13 年 岩波書店刊>より) 「パンは将来大いに用いられるなという見込がついた。もうその年 (明治 34 年) も 12 月下旬であったが、萬朝報の三行広告に<パン店譲り受け度し>と出して見るとその日

のうちに数ヶ所から、買ってくれという申込みがあった。がその中につい近所帝大前の中村屋があった(中略) それは私がこの3ヶ月間毎日パンを買っていた店で(中略) いっさいを居抜きのまま金700円で譲ろうという。(中略) さてその金策であったが幸い同郷の友人望月幸一氏に用立ててもらうことが出来て、首尾よく交渉成立し、9月以来の仮寓を引き払っていよいよ中村屋に移ったのは、その年も押し詰まった12月30日であった。その日から私はパン屋となったのである。」(相馬愛蔵 同前書)

(2) 素人の商法だからこそその独創 「私は32歳で初めて商売の道に入った。つい昨日のことのように思うが、それから37年経ち、今年(昭和13年)は69歳になった。しかし私はまだ素人だという気がしている。中村屋は今でも素人の店だと思っている。商売に縁のない家に生れ、まるで畑違いの成長をした人間が、どこまでも素人の分を越えないで、こつこつと至って地味に商売をしているのが中村屋である。(中略) が、この素人は人の後についてここまで歩いて来たのではない。中村屋の商売は人真似ではない。自己の独創をもって歩いてきている。」(相馬愛蔵『一商人として』<昭和13年 岩波書店刊>より)

(3) コンミッション(commission 口銭、手数料)排斥に見る独立性の維持 「御用商人と特別の恩寵とはつきものであって、御用商人がその恩寵に対して、一種の卑屈と追従に陥るのもまた免れ難いことであると思う。(中略) 私は大きくとも小さくとも御用商になることが嫌いだ。兵保の酒保に堅パンを納入したパン店が、当番の下士の小遣いを調達させられたことも耳にしたし、その他大会社に品物を納めるとしては、なおいっそうの奉仕を強要されたことも聞いている。(中略) 私はそれらのところへパンを納入しても、あるいは大量注文を受けても、御用商人的な考えは少しも持っていないのであったから、彼の無法な要求には断然従わなかった。またたとえそういうことで得意を失うとしても未練はないと考えていた。爾来我が中村屋は30余年を通じて、一回たりともコンミッションに悩まされたことはない。」

(4) 正価販売の堅持 「世間でどんなに特価販売が流行し、買手の心がどんなにそこへ動いて行っても、我が中村屋は割引を絶対にしない。どこまでも正価販売に一貫した経営で立っている。すなわちその正価というものが、中村屋では割引など仮初にも出来ないほんとうの正価に据えられているのであって、この正価販売への精進こそは我が中村屋の生命である。」(相馬愛蔵『一商人として』<昭和13年 岩波書店刊>より)

2 新宿へ進出(明治40年12月)

(1) 新宿に支店開設 売り上げが増す有望な土地ということで新宿進出。「妻が毎日本郷から出張することにして開店した。明治40年の12月15日であった。するとその開店一日の売上げが、既に6年間辛苦して築き上げた本郷本店の売上げ高を凌駕した。この一事でも、新宿という土地の将来伸びる勢いが早くもはっきりうかがわれるのであった」

(相馬愛蔵『一商人として』<昭和13年 岩波書店刊>より)

(2) 新宿の現在地に再移転と中村屋サロン形成 「さて支店は売り上げが日に日に向上し、将来有望と見極めがついて来るとともに、今度は店の狭さが問題になって来た。(中略) 建物四棟と借地260坪の権利を3,800円で買約した。それがすなわち現在中村屋の地で(中略) 明治42年春のことであった。」(相馬愛蔵『一商人として』<昭和13年 岩波書店刊>より)。この移転は新宿駅前の現在地になされたが、移転の年の明治42年は荻原礫山(守衛)が前年欧州から帰朝して以来、中村彝、中原悌二郎、戸張孤雁が中村屋に出入りす

るようになって急速に中村屋の芸術サロンが形成されだした年でもある。このサロンについては相馬夫妻の「己の業を通じて文化国家に貢献したい」という願いが、夫妻を中心に「中村屋サロン」と呼ばれる文化人グループの形成に繋がっていった。

3 相馬黒光(本名良)を事実上の中村屋の責任者に

- (1) 個人商店から株式会社へ(大正 12 年) 株式会社中村屋は資本金 15 万円。全株式の半分が相馬良名義、残り半分が相馬愛蔵と娘婿ボース、愛蔵の息子、娘、功労ある店員 10 名に分配された。税金対策が狙い。
- (2) 相馬良、事実上の中村屋オーナー兼責任者に 「中村屋が全株の半分以上を主婦(良のこと)の所有としたのには一通りその理由を説明せねばなるまい。私(相馬愛蔵)はこの会社組織に改まると同時に社長となったが、本郷中村屋の初めからここに至る 20 年の長年月、中村屋の名義人は私ではなく相馬良であり、同時に彼女が事実上の責任者であった。創業当時私は郷里に蚕種製造の仕事を残して来ており、これがために毎年 3 ヶ月は郷里に帰り、パン屋として最も忙しい夏期をいつも留守にしていたのであった。また日本蚕業の重役としておよそ 10 年間はこれに関与していたから、中村屋のために専心働いたのは後の 5 年だけであった。それゆえ中村屋の基礎を築いた創業以来の 15 ヶ年は、店は全く妻の双肩にあった訳で、中村屋の今日を成したものは大部分彼女の力である。(中略) 私の妻は生まれつきの情熱をこの環境に傾け尽くした(中略)株配分の期に当其の功労を第一とするは中村屋として当然のことであった。」(相馬愛蔵『一商人として』<昭和 13 年 岩波書店刊>より) **第一級の職業婦人**

4 関東大震災時の社会奉仕

- (1) 地震パン・地震饅頭・奉仕パンの販売 大正 12 年 9 月 1 日の関東大震災の際に相馬愛蔵は商人の義務として、食に困って店頭パンを求めて押し寄せる人々を助けたいと考えた。原料をなんとか調達し店の者全員で必至に製造し、原価で格安販売し奉仕。
- (2) 中村屋の良心的姿勢 多くの店が値上げして売る際に、中村屋は平常より勉強して原価販売したことで好感を持たれ、震災を一転機として売り上げがたちまち 3、4 割増加。これを中村屋にとっての記念日として毎年 9 月 1 日に 3 品を原価にて震災記念販売をした。

5 新しい食文化の展開(新製品開発と食文化の国際交流) クリームパン、カリーライス他

- (1) クリームパンの発明



クリームパン(一般的にグローブ形。中村屋で発明当時はパンに切れ目はなく柏餅の形。中にカスタードクリームが入る)

菊池武顕『あのメニューが生まれた店』(平凡社)によればクリームパンを考案した店として中村屋を紹介している。今日ではアンパン(銀座木村屋の考案)、ジャムパン(銀座木村屋の考案)と並ぶ三大菓子パンとして誰でも知っている。明治 37 年にシュークリームの旨さに感動した相馬愛蔵・黒光夫妻がパンに応用し発明。発売するやたちまち全国区になった。このときクリームを入れたクリームワッフルも同時に発売、好評を得ている。写真は安曇野市内で購入した他店のクリームパン。

(2) 純インド式カレーライス 「純印度式カレー」として新宿中村屋喫茶部（のちレストラン）の看板メニューとなった。ラス・ビハリ・ボースが日本式カレーでは物足りず、本場の味を伝えたいとの思いがあった。昭和 2 年喫茶部開設時に導入。その後、相馬黒光のアイデアによる改良を加え、昭和 8 年頃から人気商品として「新宿名物」となり、戦前の日本の洋食文化に新風を吹き込んだ。いくなれば食の国際交流を目指したといえる。

「海外への風通しの良さといえば『味覚道楽』には「印度志士」と紹介されたラス・ビハリ・ボースが「真の味は骨に」というエッセイを書いている。インドの独立運動に関係していたボースは、頭山満が仲介して、1915 年 12 月から新宿の中村屋に匿われるようになる。中村屋には彫刻家の荻原礫山や中原悌二郎らが出入りしていて、芸術的サロンの雰囲気漂わせていた。ロシアの盲目の詩人ヴァシリイ・ヤコヴレヴィチ・エロシェンコも中村屋で秋田雨雀や神近市子と交流している。ボースは中村屋の長女の俊と結婚して日本に帰化した。そして 1927 年に中村屋が喫茶部を設けたときに、ボースがレシピを教えたカレーライスが、目玉商品となるのである。日本ではカレーライスが手軽な洋食として広まっていた。しかしボースにはどの店のカレーも不味く感じられる。A ワンのカレーの評判を聞いて試したが不合格。比較的良好と思えたのは帝国ホテルのカレーだった。問題は第一に出来合いのカレー粉を使っていることで、第二に小麦粉でドロドロにしてしまうことである。スパイスは一品ずつ取り寄せて調合しないといい味は出ない。粘度もジャガイモを入れれば十分だった。材料は肉でも魚でもいいが、骨ごと使用しなければ旨味は引き出せない。実はボースが最も重要視していたのはバターである。ボースは中村屋主人の相馬愛蔵に相談して、東京府千川に牧場を作ってもらった。そこで取れる牛乳から、思い通りのバターを生産して、カレーの材料にしていたのである。」（和田博文『資生堂という文化装置』〈平成 23 年 岩波書店刊〉P287）

「ボースのレシピのまま出されていたのは発売当初だけだった。（中略）日本人の食文化に受け入れられやすいように、改良をする必要があったのだ。そこで黒光と千香子が中心となり、ボースのレシピを生かしながら、（中略）改良を加えた。ソースを多くして白いご飯にカレーがずっと沁みこむようにしたのは黒光のアイデアだった。（中略）昭和 8 年頃には人気商品になった。/ 新しい文化は、異質の文化が出会ったところで生まれるというけれど、中村屋のカレーはつまりそういうものだった。」（石川拓治『新宿ベル・エポック 芸術と食を生んだ中村屋サロン』〈平成 27 年 小学館刊〉より）

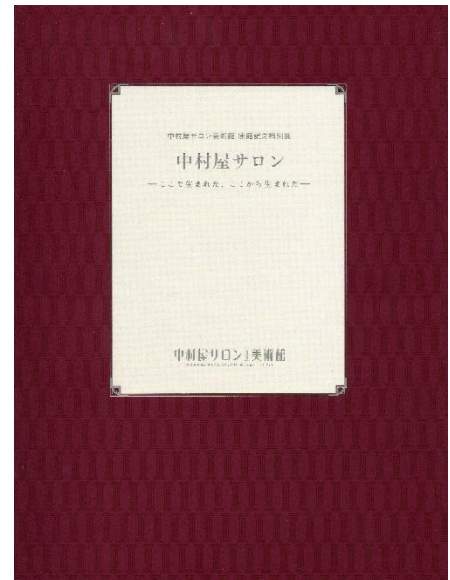
(3) ボルシチ カレーライスと並ぶ新宿中村屋喫茶部（のちレストラン）の看板メニュー。相馬愛蔵の『一商人として』によると、盲目の詩人エロシェンコが「滞留中の日常を通じて露西亜の衣食住に対し新たな興味を持ったのであった。ついに大正十一年六月ハルピンまで出かけて行って、露西亜料理や露西亜菓子を味わい、初めてそのうまさに驚いた。すなわち喫茶部開設に当って、カレー・ライスに対し露西亜のスープであるボルシチを加えることにした」とある。

(4) 月餅 新宿中村屋の代名詞ともいべき菓子。相馬夫妻が中国旅行の際に北京でラマ僧から教わる。相馬愛蔵の『一商人として』によると旅の途中で日本人のラマ僧に会った際、中国では古来八月十五日に「月餅」と称する菓子を拵え、これを月前に供えとともに、親しい間に盛んに贈答が行われるという話を聞き、日本の十五夜に中国の「月餅」を売ることを思いついたという。その結果「月餅」は好評で通年販売となる。

Ⅲ 中村屋サロンでの芸術家など支援



「中村屋サロン」の当時を今に伝える中村屋サロン美術館
(平成 28 年 7 月 8 日、朝の開館準備風景を撮影)



開館記念特別展『中村屋サロン』図録
(平成 26 年 中村屋サロン美術館)

1 荻原碌山(守衛)(1879～1910) 彫刻家

(1) 生前

□「5 年間の信州生活で相馬黒光が信州の土地で見出した唯一の心の慰めは、禁酒会グループの一員だった荻原守衛が黒光の影響を受けて芸術家をこころざしたということであつた。(中略) 相馬家の洋風サロンに黒光が持参した長尾奎太郎の「水辺の景」(「亀戸風景」)をはじめ見て、日本画には見られない迫真力に強いショックを受けたことによる。守衛はいつも黒光に接触して文学や絵画について新しい知識をむさぼるように吸収した。(中略) ロダンに師事した守衛が帰国したのは明治 41 年の春で、以後足かけ 3 年間、彼は中村屋を自分の家とし、不朽の名作を残した(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』<昭和 43 年株式会社中村屋>より)

□「1908 年に帰国。新宿の角筈にアトリエ「忘却庵」を構え、留学中に知り合った戸張、柳、高村、斎藤をはじめ、新たに中村彝、中原悌二郎、鶴田吾郎らが訪れるようになります。やがて彼らは、荻原のアトリエ近くにあった相馬夫妻経営のパン・菓子屋「中村屋」に集い、初期の中村屋サロンが形成されていきます。また荻原は、黒光への許されない愛に苦しみながら制作活動に打ち込み、1910 年 3 月、傑作《女》の原型を完成させました。しかし翌月 20 日、柳のためのアトリエを中村屋裏に完成させた夜に吐血。4 月 22 日相馬夫妻に、戸張に看取られて 30 歳で死去」(開館記念特別展『中村屋サロン』図録より)

□中村屋の家族も同然だった碌山と「病める子」 留学から帰った荻原碌山は明治 43 年(1910)に相馬家の次男襄二をモデルにした「病める子」(碌山美術館所蔵)を描いている。開館記念特別展『中村屋サロン』図録によれば「新宿角筈のアトリエから中村屋にやって来ると、荻原は若き彫刻家から一変、忙しい相馬夫妻に代わり子どもたちの面倒を見る、良き『オヂサン』となりました。子どもたちは荻原が外出すると首を長くして待ちわび、戻ると総がかりで碌山を取り合ったといいます。また、幼少より病弱であった荻原は病人に深く同情し、襄二が病床に伏すと昼夜看病し、二女千香が病院通いをすれば毎回付き添うなど、懸命に世話をし」という。

(2)没後

- 「荻原の死後、主なきアトリエで《女》を初めて見た黒光の子どもたちは<かあさん>だと叫んだそうです。(中略) 黒光は<……単なる土の作品ではなく、私自身だと直覚されるものがありました>と回想しています。」(開館記念特別展『中村屋サロン』図録より)
- 「明治 43 年荻原碌山が友人柳敬助のため(当年初頭帰朝) 中村屋構内の古洋館をアトリエに改造し、4 月 20 日落成。(中略) 落成したアトリエに柳敬助がやってきた。隣には碌山のアトリエを移して 2 階建とし、碌山館と称して碌山の遺作を公開した。美術学生等の見学者が多かった。」(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』<昭和 43 年 株式会社中村屋刊>)

2 中村彝(1888～1924) 洋画家

- 明治 40 年太平洋画会研究所で中村不折、満谷国四郎に師事。中原悌二郎と親交始まる。
- 明治 43 年 4 月 20 日の碌山死去後、碌山に代わり中村屋サロンの中心的存在になる。
- 明治 44 年中村屋裏のアトリエで制作(大正 4 年まで)。その間、相馬夫妻の長女俊子をモデルにした作品を幾つも描く。大正 3 年制作の「少女裸像」は同年 3 月の東京大正博覧会美術展に出品され大好評だったが俊子が通学する女子聖学院では<裸像>ということで大変物議を醸した。同年の「小女」(株式会社中村屋所蔵)は俊子を描いた最後の作品であり、俊子像の代表作である。その間、相馬一家と家族的なつきあいをし、結核を患っていた彝を俊子は献身的に看病した。しかし大正 3 年の「少女裸像」の一件や彝が一方的に俊子との結婚の願望に固執したため相馬夫妻との関係が気まづくなり中村屋を去る。
- 大正 9 年下落合のアトリエで鶴田吾郎と競作した「エロシェンコ氏の像」(現在、重要文化財、東京国立近代美術館所蔵)が帝展に出品され絶賛を浴びる。大正 11 年同作品は日仏交換美術展に送られ、そこでも絶賛を浴びて国際的評価が固まり、帝展審査員に推戴。

3 中原悌二郎(1888～1921) 彫刻家

- 太平洋画会研究所で学び中村彝と親交。2 人で帰朝した荻原碌山を訪ね、感化を受ける。碌山存命中、しばしば中村屋裏のアトリエを訪れるうちに相馬夫妻の知遇を得た。
- 碌山の死をきっかけに同研究所彫刻部で新海竹太郎に師事し彫刻に転向。
- 大正 5 年戸張孤雁と 2 人で日本美術院彫刻部に入り石井鶴三を知る。同年第 3 回院展に出品した「石井鶴三の首」で樗牛賞。院友になる。
- 代表作は一時中村屋に逗留したロシア人ニンツァをモデルとした「若きカフカス人」(大正 8 年制作、碌山美術館所蔵)。この作品を小説家芥川龍之介は大絶賛した。

4 戸張孤雁(1882～1927) 彫刻家

- 明治 34 年渡米しニューヨークで油彩画を学び、荻原碌山を知り交友を深める。
- 明治 43 年太平洋画会研究所に入り碌山の影響で、中原悌二郎とともに彫刻に転じた。
- 同年 4 月荻原碌山が亡くなる際、中村屋に駆けつけこの親友を看取った。
- 代表作の「足芸」(大正 3 年)、「虚無」(大正 9 年)、「煌めく嫉妬」(大正 13 年)は 3 点とも穂高の碌山美術館に所蔵されている。

5 柳敬助(1881～1923) 洋画家

- 明治 43 年荻原碌山の監督で中村屋裏の洋館を柳敬助のためのアトリエに改造。
- 同 44 年相馬黒光の世話で橋本八重と結婚、それを機にアトリエを中村彝に譲った。
- 家族や中村屋関係者の肖像画を幾つも描いたが、大正 12 年関東大震災で多く(30 数点)が焼失。「荻原守衛肖像」(明治 43 年頃制作、碌山美術館所蔵)、「千香像」(同年制作、同館所蔵)。

蔵)や布施淡の妹永島瑛子を描いた「夫人」(同年制作、同館所蔵)が知られている。

6 鶴田吾郎(1890～1969) 洋画家

○明治 40 年太平洋画会研究所に入り中村彝の無二の親友となる。

○大正 9 年中村彝と共にエロシェンコをモデルに競作、「盲目のエロシェンコ」(現在、株式会社中村屋所蔵)を描き第 2 回帝展に初入選。

○大正 14 年太平洋美術研究所の教授となる。

7 中村不折(1866～1943) 洋画家・南画家・書家

○明治 34 年(1901)フランスに渡りラファエル・コランに油彩画を師事、アカデミー・ジュリアンに在籍。明治 36 年(1903)アメリカからパリにやって来た不同舎の後輩荻原守衛(礪山)と会い、翌年二人でイギリスへ旅行。

○明治 38 年(1905)帰国後、太平洋画会に属し、後中村彝、中原悌二郎、鶴田吾郎らを指導。帰国後も荻原守衛との交友は続き、荻原守衛没後の十三回忌の際、墓碑銘を揮毫する。

○正岡子規を通じて夏目漱石や島崎藤村らの文学者と付き合うようになり、漱石の『吾輩は猫である』や島崎藤村の『若菜集』などの装丁、挿絵を手掛けている。

○不折は荻原守衛の友人ということから相馬夫妻と知り合ったとされるが、今日使われている「新宿中村屋」のロゴは不折が「六朝体」で書いたものである。

8 鳥居龍蔵(1870～1953) 考古学者・人類学者

○昭和 12 年(1937)鳥居博士が外務省の文化使節の資格でインカ帝国の発掘調査した際、文部省は学閥につながりがないとして調査費を出さなかったが、新聞でそのことを知った相馬夫妻は不足分を支援した。それ以来、相馬夫妻と鳥居夫妻は親交を結んだ。

IV 亡命弱者・留学生等の支援という形の国際交流

1 インド独立運動の志士ラス・ビハリ・ボースの庇護

英語活用



インドの詩聖タゴールを囲むボース一家と相馬夫妻

(郷土出版社刊『相馬愛蔵・黒光著作集』第 2 巻所収)

○大正 4 年 12 月、イギリス大使館はインドでの武力革命に失敗して日本に潜伏したインド独立運動の首領ラス・ビハリ・ボースの国外退去を日本に求めている。そのため対イギ

リス追従外交姿勢の石井外相は国外退去を発動、官憲を使って必死に身柄拘束しようとしていた。日英同盟もあり大きな国際問題に発展していた。ボースは頭山満(政治団体玄洋社組織)の斡旋で中村屋の相馬夫妻に匿われることとなったが、経緯は次の略年譜(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』<昭和43年 株式会社中村屋>のP27)により辿りたい。頭山満は既に岡田虎二郎の静坐法の道場で相馬夫妻と知り合っていたのである。

○相馬夫妻はボースの身の安全、相馬家との意思疎通、秘密厳守のために英語が堪能で沈着冷静、口が堅い長女俊子を連絡役とした。「頭山満は俊子がボースに嫁いでボースの身辺を守ることを黒光に望んだ。俊子が思案のあげく『嫁ぎましょう』と快諾したのはボースの革命家としての純粋な人柄にひかれるものがあつたからである。(中略)日英同盟廃棄まで六年近く、この革命家をイギリスの手に渡さないという大役を果たしたのである。」(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』P25より)。以下を参照。

日本亡命後のボース	
インド脱出後のボース略年譜	
年 代	事 項
大正4年	第1次大戦中 ガンジーアフリカより帰国 ラス・ビハリ・ボースラホール反乱に敗れ日本に脱出、亡命中の孫文と会見アジャ解放につき意見一致 ボース大隈内閣の退去命令を拒否、頭山満の斡旋により中村屋にかくまわれる
5年	英艦の天津丸砲撃事件を契機として日本政府ボース庇護に転ずるも英の追求止まず、ボース地下に潜行
6年	相馬俊子ボースと結婚して地下に潜行する。
11年	日英同盟廃棄のため英大使館のボース追求止む 印度の詩聖タゴール来朝、ボース及び相馬夫妻と会談、日印親善を盟約する
12年	ボース日本帰化の手続きをとり、中村屋の重役となる
13年	神戸に於て孫文頭山会談、孫文の大アジャ主義を頭山支持
14年	ボース俊子歿、享年28歳
15年	ボースアジャ民族連盟を結成し、各国の独立運動支援にのりだす
昭和2年	中村屋喫茶部でボース指導による純印度式カリーライスを新発売
4年	ボースインド友の会を結成 詩聖タゴール来朝、相馬黒光と日印女子学生の交換を約束
8年	大アジャ協会誕生 ボース青年アジャ同盟を結成
11年	ボース日印交友会を結成
12年	支那事変勃発 ボース印度独立連盟を結成
14年	第2次世界大戦勃発
16年	太平洋戦争勃発
17年	東条首相印度独立援助を声明 ボース印度独立連盟及印度独立軍の総統に就任
18年	ラス・ビハリ・ボース病のため帰国、代ってスバス・チャンドラ・ボース登場、印度仮政府首席に就任
20年	ボース病歿、享年60歳、増上寺で自由印度仮政府葬 日本無条件降伏、スバス・チャンドラ・ボース亡命途中事故死
なお、ボース歿後のボース関係事項のあらましは以下の通りである。	
ボース歿後の略年譜	
年 代	事 項
昭和22年	英軍のインド国民軍(ビハリ・ボースが編成)裁判に全印度人反対、暴動化した為、英インド独立を承認、8月インド独立、インド、パキスタン両自治領となる 日本戦犯裁判で印度のパール博士日本無罪論を展開
23年	ビルマ独立
25年	インド英自治領から離脱し完全独立
27年	印度パール博士中村屋を訪問、独立援助に謝意表明
29年	印度のバンテッド女史(ネール令妹、前国連総会議長)中村屋の独立援助に謝意表明
42年	印度政府愛国者ラス・ビハリ・ボースの記念切手を発行
43年	日経主催、中村屋協賛の「大正期の新宿文化人展」でラス・ビハリ・ボースの業績を展示
以上の通りで中村屋の相馬一家が全力をあげて支援したインド独立とアジャ解放の運動は見事に実をむすんだ。きっとラス・ビハリ・ボースもボース俊子も地下で満足の意を表したことであろう。	

2 盲目の詩人エロシェンコの庇護

ロシア語活用

○「中村屋が世話をしていたロシアの盲詩人エロシェンコにボルシェヴィキの嫌疑がかかり、ときの内務大臣から国外退去命令がだされたのは大正10年の5月28日であった。この事件は淀橋署員がエロシェンコを逮捕するために、中村屋に乱入狼藉をはたらいたので、その当時の新聞記事に大きくクローズアップされた。エロシェンコが日本の盲学校で学ぶために東京にやってきたのは大正6年であった。来日するとロシア本国ではロシア革命がおこり、赤色政権が誕生、赤衛軍と白衛軍援助に名をかりた列強軍の内戦になり、彼に対する本国からの送金も途絶えてしまったのである。エロシェンコのその窮状をみかねた東京日日新聞記者の神近市子女史が、相馬黒光のところへ、彼を同伴して現れ、身の振り方を相談したので、黒光はこの盲詩人の苦境に同情した。黒光はとりあえずエロシェンコを中村屋のアトリエに入れ、その生活の面倒を見ることになった。」（『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』）。エロシェンコは黒光をマーモシカ（お母さん）と呼んで慕った。

○エロシェンコが中村屋のために残した置きみやげ⇒ ルパシカ ボルシチ

3 朝鮮独立運動関係者へのもてなし 林圭、柳順天

○「大正八年二月下旬、私の家に一人の朝鮮人が来て泊まりました。林さん（林圭）といいまして五十歳くらい、その人の姪の静ちゃんが私の小間使いとして家にいる関係から訪ねてまいり、ではまあ家にいらっしゃい、とそんなわけで泊めておいたようなことでございました。（中略）淀橋署の刑事が顔色を変えて飛んで来て言いますのに、とうとう東京駅で捕えられた（中略）客をよろこび友を愛する私どもは常々実にさまざまの人に接します。それでこの年の正月も朝鮮の留学生男女三十人ほどを招待してお雑煮を御馳走し、一夕楽しく遊んだことがあったのです。それと、この林氏捕縛の一件を聞いた世間では、中村屋の二階が万歳事件の策源地だなどと誤り伝えたものであります。また私ども知らぬこととはいえ、この騒動の時に女闘士として勇敢に活躍した一女性（柳順天のこと）を家に泊めて、日本の着物を着せたりして家の子供たちと一緒に散歩に出かけるなど、そんなことと分かってみるとずいぶん大胆なことをしたものであった」（相馬黒光『黙移』）

V 早稲田大学関係文化人との交流



早稲田大学

（平成28年7月8日撮影）



早大敷地内の会津八一記念博物館

（平成28年7月8日撮影）

1 早稲田や同校教授と相馬夫妻との係わり

(1) 相馬愛蔵の母校

相馬愛蔵自身が旧制松本中学校から早稲田大学の前身東京専門学校の出身である。そのことは畏友木下尚江との係わりから来ている。在学中の思い出を「名高い坪内(逍遙)先生の講義の人気は素晴らしいもので、満堂立錫の余地もなく、自分などは講義を聴くというよりは、シェークスピアの芝居を見せられているように思い、ただただ面白かった。高田(早苗)先生の英国憲法、天野(為之)先生の経済学も呼び物であったが、三宅先生の法学はむずかしくて解りにくい」(相馬愛蔵『一商人として』)などと語っている。

(2) 母校へ多額の寄付

相馬愛蔵は中村屋の経営を始めた翌年(明治35年)「私の母校東京専門学校の大学昇格資金に、金壹百円を寄付することができた」(相馬愛蔵『一商人として』)

(3) 相馬夫妻の教育方針

宇佐美承『新宿中村屋 相馬黒光』(平成9年 集英社)によれば「女の子はミッションスクールの女子学院へ、男の子は愛蔵の母校の早稲田へ」と決まっていた(同書P339)。長男安雄、孫のボース正秀が早稲田大学で学ぶ。五男虎雄は早稲田高等学院中退。

(4) ロシア語学習師事

◎相馬黒光のロシア語学習を早稲田の教授たちに師事。「大正初頭になってから再び黒光はロシア文学にひかれはじめ、ニコライ堂で通訳をやっていた人を介し、ロシア語の研究を始めたのである。その苦心の程を聞いて当時の早大教授連が、ぼくたちも仲間にしてくれといってきた。(中略) そのうちの主な人々が助教授の桂井当之助であり、教授の片上伸、昇曙夢(のぼりしよむ)、吉江喬松等である。(中略) 片上、昇の両教授はロシア文学の権威、吉江教授はフランス文学の権威となってロシア、フランス文学の紹介にその才能を発揮した」「ロシアの放浪児ニンツァや盲詩人エロシェンコなどが中村屋に身を寄せるようになったのも黒光がロシア語を話せたからである。」(『相馬愛蔵・黒光のあゆみ』)

(5) 黒光の孫娘哲子の嫁ぎ先(昇曙夢の甥)

◎長女俊子(ボース夫人)の娘哲子はロシア文学者昇曙夢の甥樋口浩二に嫁している。

2 交流のあった早稲田関係文化人とその代表的存在 会津八一

○中村屋の相馬夫妻と交流があった早稲田関係文化人は、前項(4)に掲げたロシア文学者、フランス文学者たちのほか、親友の木下尚江(小説家・社会運動家)、秋田雨雀(演劇)、島村抱月(演劇)、西條八十(詩人・フランス文学者)、田中穂積(第4代早大総長)等多くにのぼる。

○特にその代表と目されるのが会津八一である。会津八一(1881～1956)は坪内逍遙の弟子にして歌人・書家・美術史家(早大教授)。学位論文「法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究」で文学博士。早大構内に会津八一記念博物館が設けられている(写真参照)。

○「会津八一と中村屋の関係は、大正五年に八一が黒光、愛蔵の長男安雄を早稲田中学で教えていた時、うんとしかって落第させたところ、相馬夫妻がいさぎよく落第させたことを非常な徳としてお礼を言いに会いにきてからだった。安雄は、昭和20年4月米軍機の爆撃により罹災した八一を自宅に呼ぼうとしたが、まもなく中村屋も罹災したため果たせなかった。罹災した八一はその後郷里の新潟に住み、東京に住むことはなかったが、上京するたびに中村屋を訪れ、同24年には新宿中村屋で2回書画個展を開催している。中村屋には「中村屋」「那可無楽也(なかむらや)」「黒光庵」などの看板、茶器、菓子の包装紙に八一の書が残されている。黒光は晩年まで八一を慕い、仏教学者としての八一によく質問を

出した。八一は黒光が亡くなった時『新潟日報』に「相馬黒光といふ人」で黒光の思い出を書いている。黒光の戒名をつけたのも八一だった。」（新宿歴史博物館協働企画展図録『新宿中村屋に咲いた文化芸術（株式会社中村屋協働企画）』〈平成 23 年 新宿歴史博物館〉の P99 より）

VI 優れた著述家としての相馬夫妻の業績

1 相馬愛蔵の業績 ⇒実業家としての著作を幾つも著す

- 『蚕種製造論』（明治 27 年 経済雑誌社刊）
- 『秋蚕飼育法』（明治 33 年 蚕業新報社刊）
- 『実用春蚕飼育法』（佐藤八郎右衛門との共編著 明治 40 年 日本産業株式会社刊）
- 『田舎人の見たる東京の商業』（良と共同執筆。のち『私の小売商道』に収録 明治 40 年 相馬良名義で中村屋から刊行）
- 『欧州視察談』（のち『私の小売商道』に収録 昭和 3 年 矢口書店刊）
- 『商店経営三十年』（昭和 11 年 トウシン社刊）
- 『素人の店頭学』（のち『私の小売商道』に収録 昭和 12 年 トウシン社刊）
- 『一商人として』（昭和 13 年 岩波書店刊）
- 『統一商人として』（のち『私の小売商道』に収録 昭和 15 年 六藝社刊）
- 『私の小売商道』（昭和 27 年 高風館刊）
- 『晩霜』（相馬黒光との共著 昭和 27 年刊）

2 相馬黒光(良)の業績（愛蔵との共著を除く）⇒随筆家としての優れた著作を幾つも残す

- 『黙移』（昭和 11 年 女性時代社刊）
- 『広瀬川の畔』（昭和 14 年 女性時代社刊）
- 『明治初期の三女性』（昭和 15 年 厚生閣刊）

（註）同書が採りあげた三女性とは中島湘煙（1863～1901 女性民権運動家。政治家中島信行の妻。相馬黒光(良)は長女に中島湘煙の本名「俊子」と名付けた）、若松賤子(1864～1896 翻訳家。『小公子』など。明治女学校校長巖本善治の妻)、清水紫琴(1867～1933 小説家。東京帝国大学総長古在由直の妻)。

- 『夫婦教育』（昭和 16 年 主婦之友社刊）
- 『穂高高原』（昭和 19 年 女性時代社刊）
- 『アジアのめざめーラス・ビハリ・ボース伝ー』（長男相馬安雄との共著で、昭和 28 年 東西文明社から刊行）
- 『摩文仁の石(防須正秀戦死覚え書き)』（昭和 29 年 中村屋愛光会刊）
- 『滴水録』（昭和 31 年 相馬安雄刊）

【参考】『日本現代文学大事典』人名・事項篇（平成 6 年 明治書院刊）P191

相馬黒光(1876～1950) 随筆家。本名良。旧姓星。宮城県生。明治女学校卒。相馬愛蔵と結婚して新宿中村屋を創業。荻原守衛・中島彝・エロシエンコなどの詩人・芸術家と交遊をかさね、大正期のサロンの雰囲気演出。女学校時代の北村透谷や島崎藤村、従妹の前夫であった国木田独歩の回想を記した『黙移』（昭 11）によって時代の貴重な証言を残した。④『相馬愛蔵・黒光著作集』全五巻(郷土出版社 昭 55～56)